

親会社と異業種で、 特例子会社設立

—株式会社POCHIワン—

職場
ルポ

●特集●
特例子会社



文 清原れい子 (写真) 小山博孝

取材先データ

株式会社POCHIワン

〒011-0946 秋田県秋田市土崎港中央3-4-13
TEL 018-857-3690 FAX 018-857-3693
<http://www.pochiwan.com/>
※「株式会社日本一東北」特例子会社

御野場工場

〒010-1424 秋田県秋田市御野場2-15-20
TEL 018-893-6712 FAX 018-893-6713

■代表：代表取締役 染谷光男

■設立：2011(平成23)年7月21日

■資本金：1000万円

■従業員：14人

(知的障害者7人、身体障害者2人、精神障害者1人 ※2013年9月末)



Keyword：製造業、卸売・小売業、特例子会社、精神障害者、高次脳機能障害、ジョブコーチ、グループホーム

POINT

- ① 人脈をつないで設立
- ② 社会福祉法人からの支援
- ③ 就労支援機関も支援



POCHIワン 御野場工場

トップ指令で設立へ

2011（平成23）年7月、秋田県で初めての特例子会社「株式会社POCHIワン」が設立された。ほとんどの特例子会社は、親会社の業務の一部を請け負ったり、関連する事業を行ったり、あるいは製造したものを買い取ってもらいなどの形で設立されているが、POCHIワンは親会社とはまったく別の事業、ペットフードの製造販売を展開する。

親会社は「株式会社日本一東北」（秋田市、従業員160人）。焼き鳥、鰻蒲焼、惣菜などを製造し、全国のスーパーマーケットやデパートに卸す「株式会社日本一」（本社・千葉県野田市、従業員約2千人）の東北6県、17店舗の運営を担っている。

設立までの経緯も一般的な特例子会社とはちよつと異なり、地域の人と人とのつながりを色濃く反映し、その「人脈」



芳賀明監査役



一羊会 澤田修明統括管理者

で業種と障害者雇用が決まった。その間のいきさつを、日本一東北とPOCHIワンの監査役、芳賀明さんにうかがった。「納付金対象事業所の算定労働者数が301人超から200人超に、さらに2015年4月からは100人超になる。パートも2人で1人の正社員カウント、障害者雇用率もさらに上がるなどで、障害者雇用に関心を持っていました。『日本一』の染谷康雄社長も福祉に関心を持っており、2010年ごろに障害者を雇用したいがどうしたらいいかと相談を受けました」

社内の関係者の間で、かつて社会福祉法人を立ち上げ、障害者と接した経験がある芳賀さんに白羽の矢が立った。

「全国で展開している店舗で雇用していくのはなかなか大変だろう。全国のどこかで特例子会社を作れないかとトップダウンで指示が出たのです。障害者雇用率のグループ適用を受ければ、どこで設立しても同じですので、作ることを優先

しようという流れでした」

本社のある千葉県野田市や、障害者が3人働いている関連会社「日本一フード」（岩手県二戸市）での設立を考えたが、スムーズに事は進まなかった。

人脈ある秋田で設立

芳賀さんは秋田に生まれ育ち、日本一東北への入社前は衣料品販売や社会福祉法人の運営などを手がけていた。秋田なら人脈がある。秋田で特例子会社を設立できないかと考え始めた。「ただ、『秋田で何をやるの?』と聞かれました」

思案していた2010年12月、偶然、旧知の渡部裕康さんと再会。手伝っていた秋田市内のペットフードの会社が倒産、そこでは3人の障害者が働いていたという話を芳賀さんから聞いた「日本一ホールディングス株式会社」の染谷幸雄社長が小型犬を飼っていたこともあり、「夢のある事業だね」と賛成してくれた。

「日本一は、安全・安心な食を提供していますので、純国産の材料で、安全・安心・無添加・無着色の手作りペットフードを作るならということとでゴーサインが出たのです」

事業内容が決定し、設立に向けて走り出した。ここでもまた人脈が生きる。従業員を集めるため、芳賀さんは旧知の社会福祉法人「一羊会」統括管理者の澤田修



POCHIワンで作られる手作りペットフード製品。材料は純国産で、安全、安心、無添加、無着色

明さんに相談した。

「澤田さんは『高い賃金で働かせてくれるなら』と、就労支援施設の障害者たちを快く送り出していただけることになりました。人は確保できる、やるしかないと思いましたね」

製造のノウハウと機械、設備もある。渡部さんが工場長に就任し、2011年7月にPOCHIワンを設立。社名は、Pet・Our・Care・Happiness・Innovationの頭文字をとった。

弱電製造工場だった現在の建物を見つけて、各種助成金を活用して改装、機械類を移設した。一羊会で就労訓練を受けていた知的障害者7人を中心に障害者10人と、一羊会から転職したベテラン指導員の佐藤敏明さんたちを合わせた14人で、2011年10月、操業は順調に始まった。

販路開拓に苦戦

工場では、「安全・安心・無添加・無着色の手作りペットフード」をモットーに、クッキー、干し肉のジャーキーなどの犬のおやつやレトルトフードを生産している。工場長の渡部さんは、以前の会社の経験をもとに製造を始めた。

「直近の前会社の売上げをベースに、補助金などを組み入れて自立できるように体制に持っていけるのではと事業計画

を立てたのですが、実際は販売先ゼロからのスタートになりました。『手作りの自慢の商品です』と直接販売ができればいいのですが、なかなか難しい。インターネットも一般消費者の目に触れる機会が少なく、思うように注文が入りません。一部の人たちには支持されるのですが、一般的にはどうしても安いおやつに流れてしまい、売り先を確保するのが大変です」

ペット業界の市場は1兆円強、そのうちペットフードは約3千億円だそうだが、そのほとんどは大手のドライフードで、おやつやジャーキーなどのシェアは微々たる量とか。

「OEM（他社ブランド製品の製造）中心でやっていくと考えたのですが、クライアント側からはこういう材料、こういう添加物を使って作ってほしいという注文があります。無添加、無着色、国



今年4月に取締役役に就任したPOCHIワン 渡部裕康工場長



クッキーづくり

産というポリシーにこだわりたいので、何でもお引き受けするわけにはいきません。この間、親会社社に助けてもらったり、地元のペットショップさんにもお願いしましたが、当初の事業計画まで届きませんでした」

窮状を見かねた日本一は、直前に東日本大震災が発生、被災地支援を考えていたこともあり、ペットフードで被災地に社会貢献ができないかと芳賀さんに持ちかけた。

「当初の計画通りに売上げが伸びなかったため、日本一が買い上げ、岩手県の被災地の動物病院に半年間6回、1回当たり120万円分を寄贈させていただきました」

安全・安心の手作り

最近、犬にもアレルギーが増えていて、



一羊会から障害者10人と一緒に転職して指導にあたる佐藤敏明指導員

小麦はダメ、米粉もダメという犬もいるとか。ヒエやアワなどの雑穀を使うクッキーもある。

勤務時間は9時30分から17時。工場では、クッキーの型抜き作業が黙々と進む。「犬も人間と同じです。グルコサミンとコンドロイチンを入れた米粉クッキーなど、ほかのメーカーさんがやらないものを作っています」と渡部さん。

鶏肉アレルギーの犬も増えている。ジャーキーは、ターキー、エゾシカ、魚のミンチなどを加工する。酸化防止剤を使わなくても酸化しないよう、肉の脂身は可能な限り取り除く。長谷川真さんが包丁を上手に使い、ターキーの脂を落としている。

「最初は怖かったです。大変なところは、手が冷たいことです。午前中はタラの皮と背びれや骨をとっていました。鹿肉、ささみ、サケなども使います。お休みのときの楽しみは、実家に帰ることです」



肉の脂身を取り除くなど
ていねいに作業を進める

す」

加工部門の指導は、藤原悟さん。「刃物を使いますから、ケガをしないよう、毎日繰り返し注意しています」

包装部門の責任者は一羊会から転職した佐藤さんだ。

「話が合ったときはびっくりはしましたが、新たな一歩だと考えました。私も初めてでしたので、お互いに頑張りましょうというのが一番でした。仕上げ部門でするので、ていねいに作業するように注意しています。立ちっぱなしの作業ができるようになり、集中力、持久力が違ってきたと思います」

生活面の支援体制は万全

売上げには苦戦しているが、障害者の雇用に関しては何の問題もなく、今日まで歩んできた。6人が生活する一羊会グループホームでのサポート体制は充実、勤務時間外の心配ごとはない。一羊会は1990年、自閉症4人の無認可作業所でスタート、現在は生活介護事業、就労継続支援B型事業所やグループホームを運営（92人在籍）する社会福祉法人となった。

「グループホームでの生活面がきちんとしていないと、しっかり働くことがで



ターキーの肉処理をする長谷川真さん（33歳）

きないので、私たちはそこに気をつけています。7割が自閉症でマイペース、いざごさはありません。これからも生活面のフォローはしっかりしていこうと思います」と澤田さん。

作業ができる障害者を手放さない就労支援施設があるなかで、澤田さんは積極的に社会に送り出してきた。

「自閉症の方のなかには、細かい仕事を得意とする方が多く、集中して取り組むと成果があらわれます。力のある人はほとんど社会に出そうと、民間企業の実習を経て就職させてきました。POCHIワンが設立されたときは就労移行対象者が13人いたので、半数ぐらい就職できればと願いました。障害者だけでは立上げが大変ですので、17年勤務していた職員も一緒に送り出しました」

障害者総合支援法は、利用者が就職するとその人数分の給付が減る仕組みだ。



支援にあたった秋田障害者職業センターの菱川治主任障害者職業カウンセラー（前列）、平野井ジョブコーチ（後列左）ほか

「予想はしていましたが、7人で1700万円近く減収しました。反面、『あそこに行くのが就職できる』と法人の評価は非常によくなつて、来年度の養護学校の卒業生からもうちに來たいという希望者が出ています」

グループホームから、バスを乗り換えて通勤すると1時間半かかるが、車だと10分で着く。そこで8人乗りのワゴン車を法人で購入。職員が付き添い、毎朝交代で運転してくる。「緊張します」と運転する長谷川さん。免許を所持している人が2人。これから取りたい人が1人。年度内に自分たちだけで運転できるようになつてほしいと澤田さんは願っている。工場長の渡部さんは、生活面の心配がないことが何より心強いという。

「働く以外の日常のペースが安定していないと仕事を頑張れないと思います。元気に毎日出勤しているので、仕事以外の苦労はないのがあるがたいですね」

就労支援機関もバックアップ

秋田障害者職業センター（秋田センター）は、設立時に特例子会社視察の仲介をしたり、相談に乗ったりした。今年4月に一般公募で採用した1人が退職したとき、3年前に事故で高次脳機能障害に



なり、秋田センターで職業準備支援を受けていた小林淳さん（46歳）が入社した。主任障害者職業カウンセラーの菱川治さんは、「記憶障害などがありますが、順調に訓練の作業をこなしていたので、十分対応できるだろう、職場環境が整っている、仕事に必要な支援があれば大丈夫だろうと推薦しました」と話す。

秋田センターの平野井美樹さんがジョブコーチ支援に入った。「大勢の人たちとコミュニケーションをとりながら仕事をしたいのか、ご本人は不安を感じていましたが、順調に仕事に慣れ、現在はフォローアップでサポートをしています」

社会福祉法人「いずみ会」ウェルビューいずみ障害者就業・生活支援センターの生活支援ワーカー、太田由紀さんが家族とのパイプ役を担う。「お母さんも事故当時の記憶が強いので、働けるのかという心配をお持ちでしたが、現在は仕事



高次脳機能障害の小林淳さん（上）と、実際の作業の様子（下）。小林さんをはさんと、ウェルビューいずみ障害者就業・生活支援センターの太田由紀生活支援ワーカー（左）と平野井美樹ジョブコーチ（右）

上も生活上も心配なことはありません。何かお困りのことがあったらご連絡いただくようにしています」

小林さんは、包装、クッキーの型抜きなどを経験し、いまは加工肉の下処理を担当している。温厚な人柄で、訓練生時代もほかの受講者から慕われていたという。

「大型トラックの運転手を20年間していたので、まったく職種が違いますし、知的障害、自閉症の人たちと接するのも初めてでした。最初は不安でしたが、働き始めて生活のリズムができました。や

WORKSHOP REPORT



レトルトフードの包装、ジャーキーの乾燥に取り組む

りがいがあります」

マイカーで早く出勤して掃除をする小林さんの姿を見て、ほかのスタッフにいずれ波及効果が出てくるのではと渡部さんは期待を寄せる。

「仕事上で、記憶の障害などはまったくありません。本人は作業のスピードが以前よりスローだと感じているのだと思いますが、仕事をするうえでは全然気になりません。一般企業に勤められていたので、仕事をするうえでの立ち振る舞いや、後輩の面倒をみるなど、いい風が入ってきたように感じます。最初、自閉傾

向の方に話しかけても反応がなくて戸惑っていましたが、伝えようとしたことはわかってくれていると理解してからは、困った顔はしなくなってきました」
菱川さんは、県内初の特例子会社に期待を寄せる。

「秋田で待望の、初めての特例子会社です。ので、事業が発展することを願っています。またさらに、いろいろなタイプの障害者の方を雇用していただければと思います」

特例子会社は圧倒的に大都市圏に多いが、地方都市でも設立できるのではという。「秋田でも特例子会社がありました。仕組みをうまく活用していけば、県内でさらに設立のきっかけができるかもしれません。ぜひ視察や見学にお話をしています」と渡部さん。

「経営はなかなか厳しいと思いますが、就労支援施設が、企業が安心して雇用できる環境を作れば、できるのではないかと思います」と澤田さん。

課題は売上げ増

昨春秋、こだわりのペットフードを販売する老舗企業と出会うことができた。生産量の確保、販路拡大に努めてきた渡部さんは、「ここまですが長かった」という。「当社の工場の生産体制を評価いただき、海外工場で作っていたものを国内工

場にシフトしたいということで、OEM生産が始まりました。今後アイテムは増えていくと思います。OEMプラス自社ブランドを作って生産量を上げ、あと1年で当初の計画が達成できるように頑張りたいと思います」

今年10月から、自社ブランド製品を全国のイオン系列「イオンペット」のうち100店舗で販売することも決まった。通販の自社サイトも充実させた。

設立して2年、少しずつ自立に向けて前進している。「販路の開拓も一からで、実際動いてみたら大変でした」と芳賀さんは振り返る。

「特例子会社の設立助成金が終了するまで、あと1年です。減価償却費は別に、親会社の世話にならずに資金繰りができるようにしたいと考えています。そのために、障害者の負担を増加させない新たな収益の柱となるような事業を模索しています」

人間の世界でも、安い食品のほうが売れることは確かだが、安全・安心なものへと関心が向かっている。こだわりの商品は、たとえ少数でも熱心な支持者がいる。ペットフードも同じはず。品質勝負で頑張っしてほしい。

親会社とは別業種の特例子会社が自立できたら、とても珍しいこと。その日がくることを心待ちにしている。